

# 佐渡の海を考える シンポジウム

「佐渡の海」の有効活用を皆で考えようとして、10月11日(火)両津おんてこドームを会場に開催し約600人が参加しました。

加藤広文コーディネーターの進行で、「海の恵みである海産物を観光客にきちんと提供するシニアムづくりが必要」「海を渡らないと行けない佐渡は大変魅力的だ。そんな佐渡へ行ってみたい」と目的地化してもらった結果が新潟県の発展につながる。「広域観光として、新潟・佐渡・直江津の港を使ったライオンゲル観光を研究したい」という観光問題についての提言や、「通年でタイピングが楽しめる」「日本秘境百選の一つ外海府海岸は知床にも劣らない美しさがある」「佐渡の水産業発展は、漁業関係者が海を愛し、魚を愛すること」など佐渡の海の魅力を語っていただきました。



パネリストの皆さん 泉田裕彦新潟県知事・大野裕夫北陸長門柳津運輸局長・篠田昭新潟市長・錦郡満第九管区海上保安本部長・高津川城二北陸地方整備局長・木村英太郎力屋観光汽船社長・高野佐渡富子新潟県漁協女性部連絡協議会長・永松武彦(株)ゴールデン社長・藤井徳三佐渡スクーパダイビング協会顧問・高野佐渡市長

また会場内はスキューバダイビングインストラクター平井美奈さんの海中写真で彩られ、佐渡の海を活用した海洋深層水から作られた飲料水や塩にがりを使用して作られた「愛らんと畑野」の豆腐も紹介されました。

## 全国中学生人権作文コンテスト県大会で 高千中二年の濱野沙苗さんが 最優秀賞に輝きました。

「祖父と暮らせば」

佐渡市立高千中学校 二年 濱野 沙苗

今年、祖父は米寿を迎え、盛大なお祝いをした。足腰も丈夫だし、大好きな相撲を見る時にはまた二十代を感じさせる元気さだ。それに毎日のように山や畑に行けば草を刈り、土を耕し、良い汗を流している。これが長生きの秘訣なのかもしれない。

そんな祖父は両耳が重度の難聴で私達のなげない会話や、テレビの音が聞こえず、耳元で大きな声で叫んでもなかなか返事がこないこともある。テレビの音は私達にとってはとても大きく、祖父は更に大きくする。正直いって、祖父に話しかけると聞こえるまでに時間がかかり、理解できるのに時間がかかり、家族のみんなが話しかけるのを避けていた気がする。

そこで私と祖父が考えた筆談が役に立つのだ。これは、祖父がテレビの内容が分からないとして私がチラシの裏に書いたことから始まった。最初は一人だけで行っていたが、だんだんと家族全体に広まっていた。

『涼しいついでに山へ行かんか。』と、祖母。『今日は仕事で遅くなるよ。』と、母。『人のビールを勝手に飲むな！』と、父。

筆談を始めてからは、みんなが祖父を取り囲むようになり家の中が明るくなった。祖父もそのことが嬉しいらしく、暇を見てはチラシをきれいに等分して筆談用の紙を用意している。私達にとってはこの筆談用の紙とペンが必需品となっていた。

また、祖父は目も悪いようで読むのに「手」から分らないのが伝わってこないのだが、我慢して待っている。

「……そうか、そうか。今日は「つゆ」ことがあつたのんか、じいちゃんはな……。」と嬉しそうに話し始め、筆談用の紙は一枚三枚と増えていくのだ。目や耳の衰えなどは「つづいた工夫」何でもなる。そう思っていた……。

ある日のこと、祖父と二人で留守番していた。親戚の人から電話があった。私は特別祖父には関係ないと思い、テレビに夢中だった。しばらくすると祖父が、

「おきの電話は誰からやっ」と聞きに来た。(じいちゃんには関係ない。いちいちめんどうくさいな。)

私は早くテレビを見たかったもあり、乱雑な字で渡した。それを祖父はゆっくりと時間をかけて読んでいた。

(も、さつと読んでよ。)

しびれを切り祖父をほつといてまたテレビを見ようとする。

「なんてゆつとたのんやっちゃん」と説明してくれんといじちゃんわからん。」

と何度も聞いてきた。私のイライラは爆発していった。

「いい加減にしてよーさつきからしていい。年寄りなんだからもういじもどなしていい。」

耳が遠いことをいいことにかたはしはしから祖

父に対してひどいことを言った。「さ、まだとか、クソじい」だとか。ふと、祖父を見ると眼鏡の奥がうるんでいた。謝るつもりでも、もう遅かった。ただその場に立ちつくすしかなかった。そして祖父は悲しい目で私の方を、じいっを見て話し始めた。

「……沙苗や、じいっもすまんのお。じいちゃんもおめえらちみてえに耳が聞こえて、目が見えたらのお。……こんなおじいばははさつと逝ってしまった方がいいのお。」

「この言葉をきいたとき、冷たい風が体を通り抜けた。私は紙じいば……」

「じいちゃん、長生きしてよ。」

と書くのが精一杯だった。祖父は何度も強くうなづいていった。

障害を障害と感じずのびのびと生きた祖父はずっと思ってきたはず。世界中の障害を持った人の中にもこのような気持ちがあるのではないが、もしこの気持ちがなくなら祖父のような悲しい目になつてしまつたのではないが……目や耳の障害など何でもない確かにそうだった。でも、私と祖父の間には心の壁があった。私がちよつとした思いやりの気持ちを忘れた時、祖父に自分の衰えを必要以上に意識させ、悲しませてしまった。筆談などの工夫も必要だが一番大事なのはお互いを思いやる心だったのだ。

おいしいお米が食べられるのも、学校から帰って寂しくないのも、いつも祖父がそばにいてくれたからだ。その恩返しに私は、祖父のなくしてはならないモノを守っていきたいと思う。もうあんなことを言わなくてほしいから。もうあんな悲しい目をしてほしくないから。

今日も筆談用の紙は大忙しだ。祖父の仕事がまたつ増えた。祖父と暮らせば……。